

特集 地域特産作物

V 藍【産地の取組】

城西発！次代へつなぐ JAPAN BLUE！
－阿波藍文化の伝承と広がる交流活動－

徳島県立城西高等学校 植物活用科 あわ藍専攻班

1 はじめに

阿波徳島と言えば「藍」と言われるほど、かつて隆盛を極めた阿波藍。最盛期であった明治時代中期には2,300軒の藍師が15,000ヘクタールで藍作を行い、吉野川流域の藍染料の生産量は全国の90パーセント以上であったと言われています。しかし、海外から輸入された合成藍や化学染料の普及に伴いその数は激減。今ではわずか5軒の農家が20ヘクタールで栽培を行うのみとなりました。

そこで城西高等学校の先輩たちは、平成22年3月、自分たちの手で「JAPAN BLUE」と称される阿波藍文化を次の世代へつなぐため、藍の栽培から天然染料「すくも」の生産、そして藍染めとその販売にいたる「阿波藍6次産業化プロジェクト」をスタートさせたのでした。



写真1 藍畑での栽培管理の様子

以下、城西高校における取り組みを紹介します。

2 これまでの取組

(1) 藍の栽培から染めまでの取組

現在では栽培面積を10アールに拡大し、150キログラムのすくもを生産できるようになりましたが、不純物が多く混入していたり発酵が十分でな

かったりと、すくもの品質が一定でないうえに、染め液にしていく過程でブドウ糖や苛性ソーダなどの添加物に頼るところが大きく、まだまだ改善の余地がありました。



写真2 投入される添加物（ブドウ糖）

(2) 藍染め体験活動をととした交流活動

地元保育所や幼稚園をはじめ、多くの方々と藍染め体験をととした交流活動を展開してきました。その中で「体験の機会をもっと増やして欲しい。」という意見が多く寄せられ、交流活動の活性化が課題となりました。

(3) 阿波藍の魅力を発信する技術習得

本校での阿波藍に関する取組を、本校ホームページで随時紹介することはもちろんのこと、阿波藍の歴史や私たちの藍に関する取組をまとめたDVD「城西高校版 阿波藍の魅力」を完成させ、本校ホームページなどで動画を視聴できるようにしました。

私たちは、先輩たちの取組や思いをしっかりと引き継ぎ、さらに深化・発展させるため、次のような活動目標を立てました。

3 活動目標

- (1) 匠の技に学ぶ
- (2) 交流活動を活性化させる
- (3) 全国発信を積極的に行う

4 活動内容

(1) 匠の技に学ぶ

私たちは平成25年度より、本校の卒業生で天然灰汁発酵建本藍染めの第一人者の矢野藍秀氏から、300年以上の歴史を持つと言われる染め液に関する伝統技法について学んでいます。そして、本年度ついに伝統技法での藍建て（天然染料すくもを染め液にすること）に成功し、大きな自信と今後への励みとなりました。全てを天然素材にこだわることにより、生地を強くしたり、防菌や防虫、防臭等の藍染め本来の人に優しい効能を持つ商品の製造が可能になります。また、実際に染色



写真3 本藍染め工場見学



写真4 本校での藍建ての様子



写真5 佐藤昭人氏による説明の様子

してみte感じたことは、何とも表現しがたいその奥深い色合いでした。今後は、「藍染め」から「本藍染め」へと変更し、商品の差別化を図ることで、消費者の藍染めに対する興味・関心の高揚を図りたいと考えています。

また昨年度から、無形文化財・現代の名工・卓越技能者の阿波藍製造所19代目藍師 佐藤 昭人氏、20代目藍師 好昭氏親子を訪ね、天然染料「すくも」の生産について、その技術の習得に取り組んでいます。切り返し作業の際、強烈なアンモニア臭に自然と流れる涙を拭い、むせびながらの実習に逃げ出したくなるほどです。学校での実習とは全く異なる発酵熱や強烈なアンモニア臭を体験し、改めて阿波藍文化を継承することの重みを強く感じています。佐藤氏や矢野氏からは今後も継続してご指導を頂くことになっており、私たちの取組がより一層深化するものと確信しています。



写真6 ミャンマーの大学生との交流

(2) 交流活動を活性化させる

毎年の恒例行事ともなった近隣の幼稚園や特別支援学校、そして、徳島県産の農林水産物を県外へPRする「新鮮なっ！とくしま大使」の皆さん等との藍染め体験交流では、幅広い年齢層の方々と交流の輪を広げることができました。

「子供たちが本物に触れることが、心の成長につながるんです。」という幼稚園の先生の言葉や、「郷土の伝統を次の時代へつないでいこうとする皆さんの取組に感動しました。応援しています。」という「とくしま大使」の方の言葉は、今後の活動への励みになりました。

また、昨年11月には、青年海外協力協会主催の事業で来日していた、ミャンマー 東ヤンゴン大学の学生25名が来校し、藍染め体験をとおした初めての国際交流が実現しました。当日は、コミュニケーションの全てを英語で行うということもあり、ハンカチへの模様の付け方や、染めの技法の説明などを全て英語訳したパネルを作るなどの準備に追われました。身振り手振りを交えた私たちのつたない英語での説明にも真剣に耳を傾け、積極的に質問をしてくださるなど、とても明るい雰囲気の中であっという間に楽しい時間が過ぎていきました。

さらには、今年の7月に「日本語・日本文化研修」で来日した韓国と台湾の大学生・高校生総勢60名との藍染め体験交流が行われました。2度目の国際交流ということもあり今回は『一緒に藍染めを楽しむ』という感覚で臨むことができました。染め液からハンカチを出す時には「ウー、スー、

サン、アー、イー」(中国語で5、4、3、2、1)や「ハナ、ドゥル、セ」(韓国語で1、2、3)と、大声で合図を出したところ思いの外大きな反響があり、その場を一層和やかな雰囲気にすることができました。

外国の方々に、阿波藍の文化やその魅力、また、それを次代に伝承しようとする私たちの取組を理解していただくことができたほか、私たちにとっても外国語を使ってコミュニケーションを図ることで、国際感覚を養う貴重な体験となりました。

(3) 全国発信を積極的に行う

私たちは、JA 全農主催の「全国高校生みんなDE笑顔プロジェクト」にエントリーし、阿波藍に関する私たちの取組をブログで紹介しました。このプロジェクトを閲覧してくださった経済産業省の方の目にとまり、私たちの取組の様子が経済産業省のホームページからも全国発信されました。

また、平成23年2月にスタートした「藍の種子ネットワークづくり」(私たちが採種した藍の種子を希望者へ配布し、栽培者を広げる取組)が新聞に取り上げられたり、テレビ番組で全国放送されるなど様々なメディアをとおして全国発信できたこともあり、大きな反響が寄せられています。これまでに、個人と団体を併せて全国から900件を超える応募をいただいております。昨年には念願であった47都道府県制覇も達成できました。このネットワークで繋がった方々が全国各地から見学に訪れるなど、小さな藍の種子が私たちと全国各地とを結ぶネットワークづくりを担ってくれてい



写真7 韓国・台湾の学生らとの交流



写真8 全国へ発送される藍の種子

ます。

5 活動のまとめ

(1) 技術力を向上させる方法が見えてきた

佐藤氏や、矢野氏等の専門家からのアドバイスや、現場で本物に触れる体験は、体で覚えることがいかに重要であるかを気付かせてくれました。すくもや染め液を「生き物（赤ちゃん）」として扱うことは両氏に共通している姿勢でした。温度、湿気、臭い、手の感触等、こまめな観察を重ねることで「匠」の技術に一步でも近づけるよう努力します。

(2) 「つながり」を拡大できた

積極的な情報発信により、私たちと全国各地とのネットワークを拡大できたほか、国際交流という貴重な体験にもつながりました。今後も様々なメディアを利用した情報発信を積極的に行い、よりグローバルなつながりの実現を目指します。

6 今後の課題

(1) 天然染料「すくも」の品質向上を図る

私たちが生産する天然染料「すくも」の品質は年々向上しているものの、依然として不純物の混入や不完全な発酵が課題となっています。佐藤阿波藍製造所で天然染料「すくも」の切り返しを体験させていただいた際、佐藤氏から打ち水の量は少なめにすることなどのアドバイスをいただき、今後の取組への大きな収穫となりました。

(2) 6次産業化オリジナル商品を開発する

伝統技法の伝承とともに、本藍染めオリジナル商品の開発を積極的に行い、その魅力を発信していきます。現在も、「かわいい」をコンセプトにし



写真9 本校での「すくも」作りの様子



写真10 コースターとストラップ

たストラップや、機織りコースターを製作していますが、さらに誰からも愛される本校オリジナル商品の開発を目指します。

今後も、「JAPAN BLUE は AWA (OUR) BLUE!」を合い言葉に、世界に誇る阿波藍の伝統と文化を次代へつないでいくことを私たちの使命とし、本プロジェクト学習を継続します。